

援助職のリカバリー

《26》

～「セックスレス」に立ち向かう(7)～

袴田 洋子

先輩薬剤師の香と飲みに行ったあと、京子は、日本の女性のセックスライフについて、あれこれ考えていた。日本人女性は、やはり自分のからだについて、知らなさすぎる。「セックスなんて、考えたこともありません」「性欲？そんな恥ずかしいこと…」などと言ってしまう。一体、なぜ、こんな事になっているのだろう？なぜ、下ネタ的な扱いにされてしまうのだろう？なぜ、自分のからだのこととして、正面から向き合わないのだろう？考えれば考えるほど、不思議な思いになり、同時に小さな怒りも感じた。

香は、現代のセックスレスの問題や、女性のセックスライフについての意識の低さは、「原因なんかいろいろある。長時間労働、家の狭さ、ストレス、疲労、などなど。共働き世帯が増えたが、妻が担う家事負担は、それほど変わらない。家事、育児、仕事に追われ

て、寝る時間を確保するのもままならない。そんな中で、夫は射精することで得られる快感があるが、妻は、オーガズムを得られず義務で相手をするなんて、とても不公平に思うだろう」と言っていた。また、「ある種の同調圧力もあるかもしれない。こんなことを話したら、おかしい人間として見られてしまうのではないかという恐怖のために、女性たちが、自分たちのセックスライフについて語れないのではないか」とも言っていた。確かに、ネットなどでは、ずいぶん女性のセックスライフについてのまじめな情報は目にするようになったが、ネットはあくまでも仮想世界。本当に誰かが言っているのかどうかは、わからない。女性の性に関する知識や情報は、もっと正しくまじめに世の中に普及されるべきである、と京子は真剣に考えた。そんな京子の思いを香は感じ取っ

たのか、ある本を紹介してくれた。「ちつつのトリセツ 劣化はとまる」という助産師が指導・監修した、女性のからだのケアに関する大変にまじめな本で、京子はさっそくアマゾンで購入し、読んでみた。内容は、本当にまじめな、女性のための女性の膣のケアに関するもので、膣のケアをしないと膣内はどんどん干からびていき、尿もれや便秘など、老化に伴う残念な症状がじわじわと出てくる、というものだった。そして、女性にとって、セックスやマスターベーションが大切な理由も書かれていた。

京子は、今まで考えないようにしていた、夫・弘明とのセックスレスについて、真剣に向き合おうと決意した。

金曜の夜、ベッドに入った京子は、弘明に「ねえ、エッチしたい」と素直に言った。弘明は、一瞬、驚いたような雰囲気だったが、暗がりでは表情は見えない。が、すぐに何も言わずに、隣のベッドで寝ている京子の掛け布団をめくり上げて、京子に抱きついてきた。胸やクリトリスに触れられ、とても感じる事ができた。指の力が強く入り、やや痛みを感じた時は、率直に「ちょっと痛い」と言った。だいぶ、体が火照ってきた頃、京子は「これ、使って」とベッドの下から、ネットで購入したバイブレーターを弘明に渡

した。弘明は、「へー、こんなの買ったの」と言いながら、スイッチを入れて、京子のからだに当てた。痺れるような快感を得て、しばらくして、京子はオーガズムを感じた。それでも、きっと膣の中は、挿入で痛みを感じないほどには十分に潤っていないだろう。京子は、「これ、塗ってみて」とグッズと一緒に購入した潤滑ゼリーを弘明に渡した。ネットではたくさんの種類が出ていたが、口コミ評価が高かったアストログライドという商品を選んだ。塗ったあと、すぐに乾かず、潤いが長時間続くという高評価だったからだ。「たっぷり塗って」と弘明に言って、塗ってもらったのはいいものの、やや冷んやりとした感じだった。アストログライドの他のゼリーには、塗った時に温感がある商品も確かあった。今度はそれを買ってみよう。弘明が挿入しても、痛みは全く感じなかった。1分ほどの挿入を経て、弘明は射精した。

ささやかな妊活をした10年前。10年ぶりのセックス。清水の舞台から飛び降りる…くらいの気持ちだったか、それほどではなかったか、終わってみれば、なんということはない、夫婦の営み。気持ちよかった。いい運動にもなった。10年ぶりだから、セックスって、どうやるんだっけ？というよう

な感じもあった。ぎこちない感は否めない。でも、間違いなく言えるのは、ちゃんとセックスして、よかったということだ。夫は、「京子さんは、セックスするのが、嫌なのかと思っていた」と言った。ささやかな妊活の時期を除けば、おおよそ20年間のあいだ、夫は一人でマスターベーションしていたと言っていた。よく離婚にならなかったものだと、京子は、夫に気の毒なことをしたと思った。

気持ちのいいセックスができる幸せ。何歳までできるだろう。お互いの体力に負担をかけずに行う夫婦の営み。次は、いつできるのかな。週に一回、できるかな。二回くらいできるかな。疲れちゃうかな。寝不足になっちゃうかな。夫は嫌がらないかな。本当は面倒臭いのかな。いろいろなことを心配しだすと、きりが無い。素直に、気持ちを伝えて、お互い気持ちよくやっっていこう。

週明け、京子の熱心な研究報告を聞いたあと、香は、自分の経験が少しは役に立ったのだろうか、ぼんやり思った。こんな自分の経験。男と女にまつわる、ずっと昔から語られる話。日曜の昼過ぎ。高校一年の娘は、友達と映画を見に出かけた。家業を継いだ夫は、今日も仕事で店を営業している。携帯電話の通知音が鳴り、画面を見る。

達夫からのメール。「今度、いつ会えるかな？」